
霊喰らい(たまぐらい)

安部飛翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊喰らい（たまぐらい）

【Nコード】

N3163BA

【作者名】

安部飛翔

【あらすじ】

おんじゅう
怨龍。

遥かなる何時とも知れぬ過去。

人と世界に対する怨みと怒りより生まれた怨念。

悠久の刻を存在し、数多の魂を喰らい、成長し続け、ついには龍と成り、神々すら喰らう様になった化物。

彼は己が消滅を望んでいる。

人が己が存在の価値を無くす程の奇跡を見せてくれる事を望んでいる。

だが人がそんな奇跡を示す事は終ぞ無く。

ただ一つ、彼は契約の代価として、善行を成す事もあるという。

契約の条件はただ一つ、その魂を怨龍に喰らわれる事。

だから怨龍が契約を持ち掛けるのはその価値のある魂の持ち主のみ。そして相手が望んでいなければその魂の価値は下がるので、あくまで提案するのみ。

決断するのは相手自身。

ただし、怨龍に喰われるという事は、その怨念の奔流の中に自らの魂を投げ出すと言う事。

死など生温い苦痛が待つ。

当然それを教えた上で、怨龍は相手の意思を確認する。

そうやって怨龍は、より成長し、なお悠久の刻を永らえ続けるのみ。

練習作です。

作者はホラーというものを勘違いしてる節がある為、カテゴリーの違いを起こしてる可能性があります。

1話

「はあっはあっはあっはあっ、はあああ〜」。……これで暫くは、大丈夫……でしょうか？」

真夜中の学校。

狭い廊下。

暗闇の中、必死に息を荒げ駆けていた10代半ば程の少女が、足を止め、ポツリと独り言を溢す。

汗に塗れた顔。

髪からも汗はしたたり落ちている。

清楚で上品で、可愛らしく色気さえ感じられる、屈指のデザインだと近所でも評判なこの学校の制服もまた汗にまみれている。

上着もスカートも酷く乱れ、ある意味扇情的な格好だ。

少女自身の容姿もあり、尚更それが目立つ。

腰まである黒髪は、昨今にありがちな余計な手を入れる事は全くせず、あくまでナチュラルで、汗に濡れ光りながらも、まるで黒いシルクのように、どこまでもなめらかでサラサラとした質感を感じさせる。

瞳は大きくも切れ長で釣り目気味、黒い瞳もまた奥深い色合いを宿し、そこに巨大な恐怖の感情を乗せながら、なお強い不屈の意志を燃やしている。

肌の色は健康的な白さで、鼻筋も通り、唇の形も良く色香すら感じさせ、清楚で健康的でいてそれでいながら色っぽいと、色々良いところ取りをしたような美少女だ。

顔だけではない、身長もまた160センチメートル程と少女としては結構なもので、腰の位置も高く脚は長い。

胸もそれなりに大きくDカップ程だろうが、さらにウエストはキュツといった擬音が似合いそうな程に引き締まり、腰のラインもまた扇情的で、脚も太すぎず細すぎず、理想的なラインを描き出して

いる。

これほどの容姿を持った美少女もなかなかいないだろう。そんな少女が、こんな真夜中の学校などで何をやっているのか。だが、学校の様子もまたおかしい。

いくら真夜中とはいえ、雇われている警備員が巡回している筈なのに、先程までかなりの足音を立てていたにも関わらず、それに対する反応が何もない。

それどころか、あまりに静寂が色濃すぎる。

少女は周囲を見回す。

奇妙な事に、前方も後方も、どちらも果てが見えなかった。

それに階段も見当たらない。

学校とはこれほどに広大であつただろうか？

いや、その学校によつては確かにそのような規模の物も存在するであろう。

だがそれにしては、先程も述べたように、廊下が狭いのだ。

少女は、何か確認するように手を伸ばし、廊下にあつた窓に触れ、鍵を開き窓を開こうとする。

だが奇妙な事に、鍵は開けたのだが、窓は開けない。

いや、開けないどころか、欠片も動きもしない、そして音さえも立てない。

まるで窓枠と完全に一体化してしまっているかのようだ。

少女は覚悟を決めるように瞳を閉じ深呼吸すると、思いつき右腕を引き、窓ガラスに掌底をかました。

それこそ窓ガラスを叩き割らんとばかりに、全く加減など無いものだ。

通常、どれだけ覚悟を決めていようが、僅かばかりの躊躇いまでも、完全に消すなど不可能に近い。

しかもこんな少女がだ。

しかし、少女はやつてのけた。

全く逡巡など存在しない、全力全開の一撃。

驚嘆すべき胆力だ。

だが、窓は割れるどころか、ほんの僅かの振動すらしなかった。どころか、少女の掌に、全く衝撃すら伝わって来ない。

まあ、痛みが無い事自体は良い事だが、などと思いつつも、今度は教室のドアに手を掛け、横にスライドさせようとする。

だが同じ事だった。

開くどころか、緩い作りの筈の教室のドアが、欠片も揺らぐ事さえなく、音を立てる事すら無い。

分かつてはいた事だった。

先程からそれこそ色々と試してはみたのだ。

とつくに逃走の邪魔になる為捨て去った鞆、その中であつた色々な道具さえ使つて様々な手段を挑戦もしてみた。

今回のこれなどそれらの試みに比べれば生易しい部類に入るほどだ。

それでもやはり、元々少女の瞳にあつた絶望の色は尚濃く深くなる。

それでいて、ますます少女の瞳にある不屈の意志の炎は際限など無いかのようにどこまでも強く燃え盛った。

少女が何に恐怖し、何に絶望しているのか、今はまだ分からない。だが、少女のこの意志の力、果たして本当にこの年代の少女の物だろうか？と思える程に、あまりにも強すぎる物なのだけは間違いない。

「くっ、あの馬鹿小杉のグループはいつもいつもっ、……顔無し様の儀式、とか下らない事に優子と一緒に参加するんじゃないって、優子を止めるべきだった。今更後悔しても遅いけど、とりあえず今日学校に来てた面子を見ると、私が始めの標的みたいだからあの子はまだ大丈夫だとは思うけど、今なんとかしないとすぐにあの子も……」

強く後悔するように吐き捨てる少女。

と、その時、少女が駆けて来た後方から、ずるずると、まるでな

にかがゆつくりと這いずるような音と共に、おおおおおん、と得体の知れぬ、鳴き声ともなんとも呼べぬ響きのようなものが聞こえてくる。

「ちっ、たかがネットの書き込みと思って本気にしてなかったけど、まさか本当だったとはね。小杉達も優子に対する嫌がらせのつもりで誘ったんでしょけど、この調子なら、あいつらと同じ目に会う事は間違い無いわね、ハンッ、あいつらに関しては自業自得だけど」
恐怖に顔を引き攣らせながらも、悪態を吐きつつ、どこまでも強気に笑う少女。

だがそのまま言葉が雄弁に続く辺り、彼女が恐怖に囚われているのは間違い無いのだろう。

人とは何か強い感情を誤魔化そうとする時に雄弁になる生き物なのだから。

「まったく、何が気に入らない自分の顔を美しい物へと変えてくれる顔無し様、よ。人の顔を喰らい同化する化物の間違いでしょうが、優子も元は良いから、化粧とかしてみればって何時も言ってるのに、まだ信じてくれないし。なんでこの龍子様よりあんな馬鹿共の言う事を信じるのか。あくまでまだ素材とはいえこの私が対等と認めた美貌よ？この私が親友と認めたのよ。なのになんでまだあんなにネガティブなのか、本当にもう……。なんとしても説教して、あの性格は改めてやらないとね。なんだってこの私の親友なのだから。その為にも、絶対につ……。生き延びる！！」

紛れも無く恐怖に吞まれての独り言。

それでもその言葉はあくまでも強気なものだ。

誇り。

プライド。

いや、そのような安っぽい物ではない。

彼女、龍子という少女が抱くそれは、間違い無くもつと強く高尚なものであった。

この年代の少女が抱くには異常な程に。

「とりあえず、無謀に挑んでも意味が無いからやっぱり逃げるけど。対策を考える為にも一度くらいはじっくり姿を拝んであげないとね」
龍子は告げると、いつでも逃げ出せる体勢を取りながらも、敢えて後方より迫るナニかを待つ。

恐らくは、本気で生き延びる、その為に、相手を観察しようというのだろう。

恐怖を飲み込み、絶望を覆い隠し、自らにとっての危険を見定めようというその精神力。

本気で、龍子は強かった。

人として、紛れも無く強かった。

しかし、その強さを以ってしても、その姿を見た瞬間、一瞬頭が真っ白になる。

「ひうつ!?!」

それは顔であつた。

ただの人の顔。

だが無数の顔、顔、顔、顔、顔、顔、顔……。

人の顔が寄り集まって出来たナニか。

しかも一つ一つの顔の表情があまりに酷い。

血の涙を流し、鼻水を垂らし、口からは涎が滝のように流れ落ちる。

苦悶、悲嘆、絶望、狂気、その他ありとあらゆる人の負の感情だけが全ての顔に張り付いている。

全ての顔が張り付く中心は何か得体の知れないモノが蠢くのみ。

ついそちらを見てしまい、龍子は思わずまたも恐怖に吞まれ、吐き気に襲われ、見た事を後悔した。

肉。

ひたすらに肉が蠢いている。

ありとあらゆる人の肉体を構成する組織や器官。

内臓が潰れ再生しまた潰れ、更には喰らいあう。

筋組織が表出し、千切れては再生し、互いに明らかに規格の違う

ものとくっ付き、またもミキサーに掛けられたように断裁される。骨が砕け、奇妙な形に組み上げられ、また砕かれる。

他にも様々な物が、ひたすらにグロさという概念をこの世に現出したかの如く、悲惨な光景を晒している。

普通の人間であれば、正気を保てるとも思えないそんな光景を見て、なお龍子は思考に冷静さを残していた。

無数の顔の中に、幾つか見知った顔。

行方不明だのなんだので消息を絶った先輩方の顔を見つけていたのだ。

そう、この学校は行方不明者が多い事で有名な学校であった。

それでも未だに学校が何事も無く存続できているのは、それらの行方不明に事件性が見られない事、何より行方不明者達が皆、素行不良で知られる者ばかりだったからだ。

色々と噂が噂を呼び、様々な話が囁かれる。

だが結局はそこ止まりだ。

真剣に動く者など誰もいやしない。

当然だろう。

今までの被害者は皆、家族にさえ忌まれていたようなそんな者達だ。

家族でさえ率先して動こうとしない、しかも状況的に事件性が薄い行方不明に警察組織などが、ましてや他の誰かが積極的に動こうとするだろうか。

せいぜいオカルト関係の何かの関係者ぐらいだ。

それとて結局は本物ではなく偽者達、しかもそれ系の雑誌に面白可笑しく書きたてる程度だろう。

それとてこのように直面してみれば全く以って的外れな見解ばかりだったと良く分かる。

まあ、この学校にはあまりにそういう話がありふれているので仕方無い面もあるのだが。

しかもそんなオカルト関係に手を出すのは、この学校の生徒でも

先程も述べたような者達ばかりだ。

品行方正で知られ、常に人の上に立つてきた龍子……今はまだ一年生なのでせいぜいクラスの委員長程度だったが、二年生になれば生徒会長に立候補するつもりで、しかも小学校・中学校の実績からも、当選は誰からも確実視されていた。

そんな生徒が、この学校のオカルトの儀式の類に手を出したのなど、この学校が始まって以来始めての事だろう。

龍子の親友……と龍子が勝手に決めたのだが、ともかくその優子でさえ、素行不良ではないが、あまりに消極的でネガティブな性格で、目立たないが故に、クラスにさえ気に掛ける者はおらず、親兄弟にも蔑ろにされていると聞く。

その事には心中密かに憤っていたものだが。

だからこそ小杉達のようなグループの標的にされる。

恐らくは龍子が参加する、などという想定外の事態が無ければ、なんだかんだと言って彼女等は、優子から金銭を巻き上げていた筈だ。

そういう噂に事欠かないグループなのだ。

それでも誘われれば付いて行ってしまう。

むしろ嬉しいとさえ思ってしまう。

それが優子という少女だった。

恐らくは幼い頃から常に周囲から蔑ろにされてきた反動なのだろう。

そして優子が龍子に対し、コンプレックスを持って、どこか距離を置こうとしている事にも龍子は気付いていた。

尤も、そんな事、龍子が許しはしなかったが。

コンプレックスだの、負い目だのどうでもいい。

優子はこの龍子が始めて気に入って親友とした相手だ。

だから逃すつもりはなかった。

それに優子のコンプレックスだの負い目だの、そんな物もいずれ全て根こそぎ取り払ってやるつもりだった。

親切の押し売り、余計なお世話と、当然分かつてはいる。

その程度察せない龍子では無い。

だがそんな事は関係が無い。

ただ自らの意志を以って、そんな全てを押し通すのが龍子という少女の生き方なのだから。

ほんの僅かの間の思考であつた。

だが、ナニかは龍子との距離を確実に詰めていた。

自覚して舌打ちする。

今の思考はあまりの状況に対する一種の逃避だったのだと。

この自分ともあろうものが。

不様で下らぬ失態に、彼女は己が愚かさを心中百万言にも渡り責め立てる。

と同時に、それすらも無駄な逃避と判断し、身体は既に動き出していた。

再び走り始め、逃走を再開する。

いくら気を吞まれてしまったとはいえ、始めから取っていた逃走の体勢までは崩してはいなかった。

とりあえず、相手を見はした。

一見しただけで対処法など分からなかった。

当然だ。

そんな簡単なら誰も苦労はしないし被害者も出てはいない。

だが、逆に悪い情報はある。

選択肢が一つ潰れた。

逃げ続ければどうにかなる、それは不可能らしい。

何故なら、素行不良に走ったとはいえ、元は陸上部で長距離ランナーとして期待されていた先輩。

彼女の顔もまた、あのナニかに張り付いていたのだから。

一応は、儀式に参加するにあたって、龍子は色々とネットや噂などで情報を集めてある。

余計な手間かもしれない。

それでも尚、何かを行うのに、それこそ馬鹿みたいな学校でのオカルトの儀式を行うのにも、万全の情報を集めるのが彼女の流儀であった。

役に立たなければそれはそれだけの事だ、そのまま無駄な事をしたと切つて捨てれば良い。

だがそれが役に立つ状況になった時に、あの時こうしておけば、などと後悔するのは、龍子の流儀に反する。

カードは多ければ多い程良い。

無駄なカードだろうと、使い道が無いとは限らない、いや、それを思いついてみせてこそ一流だ。

龍子は自らに一流たるを当然のように任じていた。

いやそれでは物足りない、超一流、その領域に足を踏み入れるべきだと自らを規定していた。

当然自らのような小娘が、今、その領域に足を踏み入れているなど、愚かな勘違いはしていない。

だがいずれはそこに立つ。

それは龍子にとって規定事項だ。

龍子は何か特別な家の生まれという訳ではない。

それなりの中流家庭の両親の元に生まれた一人娘だ。

何か特別な教育を受けた訳でもない。

両親は共に善良で、家族思いの人間で……。

だからこそ、そんな子供に、無駄に強制的に教育を押し付けるような思想の持ち主では無かった。

だが同時に、子供が望むのなら、当然出来る範囲ではあるが、学ぶ為の機会を与えてくれた。

その環境で、龍子は自らこのように育つてみせたのだ。

ふと、自らが過去を回帰している現状に気付き、走馬灯の類か何か、自分は死でも覚悟しているというのか、と龍子は唇を噛み締め、眼光を炯々と光らせる。

冗談ではない。

生き延びる。

それは龍子にとって大前提条件だ。

何かを成す。

成してみせる。

世界を驚かせる程の大きな事をやってみせる。

もはや龍子にとってそれは生きる為の原動力ともいえる衝動であった。

しかし、そんな龍子の心情とは裏腹に、無意識に過去の回帰は続く。

優子に出会ったのはほんの僅か前の、そう、この高校に入学してからの事だった。

新入生挨拶で当然のように壇上に立ち、教室に入った時点でもひどく目立っていた龍子。

当然、同じ中学からの生徒も居て、龍子は場の中心だった。

そこから外れているのは、それこそ小杉達のような、元々世間から外れたグループ。

そして、優子のような孤独を当然とし生きて来た者だった。

龍子は一目見た瞬間、優子に目を奪われた。

勘違いされるような言い方をするならば、一目惚れと言ってもいいかもしれない。

勿論そんな同性愛だの下世話な感情は無い。

ただ一目でまず龍子は彼女の容姿の素材の良さを見抜いた。

ぼさぼさに伸ばされ、それこそ足下まで伸び、前は目元まで隠された髪。

だが手入れがされてないだけで、龍子と同じくその髪はとても質が良く、整え、切り揃えれば、どれだけの輝きを放つだろうか？

隠された目も、ほんの僅か覗いた瞬間に見て取った。

大きく丸く、優しい柔らかさを持った、どこまでも淡い光を宿した奥深い透明な綺麗な黒い瞳であった。

鼻梁は当然のようにスラリと通り、唇もまた、乾燥してそうと見

えないが、手入れをすれば、艶かしい程の輝きを放ち、色香を放つだろうと思える。

顔のラインもスリリと整い、元だけならば、間違い無く龍子と同等のポテンシャルを秘めていると龍子は見抜いた。

身長は150センチメートル程と小柄ではあるが、驚いた事に胸はEカップ程もある。

一瞬、龍子は、負けたなどと、柄にも無く落ち込んだほどだ。

全体的に、龍子ほど、徹底的に絞られてはいないが、決して太つてはおらず、ある意味理想的な女性的柔らかさを備えたライン。

当然のように脚も長かった。

どうしてこれほどの素材が、あのような場所で一人孤独に席に座り、誰とも交流を持たず、孤独でいるのか分らない。

だが何より龍子が惹かれたのはその容姿ではない、何か、包み込むかのような柔らかな雰囲気。

後から聞けば、他の者達は、暗いだの地味だの不気味だの散々言っていたが、それがどれほどの外的な事か。

その、傍に居れば安らげるだろう空気に、龍子は惹き付けられていた。

幼い頃から、自らで自らに任じた事とはいえ、常に張り詰めた世界の中に、身を置き続けていたが故に。

だから龍子は自然と歩み寄っていた。

周囲が困惑する気配を感じ取るが、当然無視。

そもそも気に掛ける必要すら感じない。

元より龍子は今まで誰かに頼った覚えなど無い。

常に己が力のみで道を切り開いて来た。

あの当時は知らなかったが、優子に目を付け、色々とかつていた小杉達のグループ。

彼女達もまた龍子に鬱陶しげな視線を向けていたが完全無視。

相手にする必要すら感じない手合いだ。

教室の男子達は、女子達が醸し出す空気に、何やら困惑の様子だ

が、勿論無視。

今まで龍子は同年代で、対等に扱うに足る男子などというものに会った事は無い。

当の優子もまた困惑の視線を浮かべていたが、それすら無視。
なぜならこれは龍子が龍子自身の意思で行う事なのだから、相手の意思すら関係無い。

どこまでも龍子は己が道を突き進む少女だった。

そして龍子は優子の前に立った。

ビクンツ、と振るえる優子。

元来龍子は、そのような気弱な反応を嫌い、嫌悪する性質だが、何故か優子に対してはそのような感情を抱かなかった。

相性というものののだろうか？

なにせよ、あの出会い是一種の運命だったのだと、今でも龍子は勝手に確信している。

「あなた、お名前はなんというのかしら？」

「え、あの、えと……」

「慌てないで、落ち着いて？お名前を聞かせて欲しいだけなの、慌てる必要なんて何もないでしょう？」

軽く龍子が浮かべてみせた微笑。

眼前の優子は見惚れ、周囲の者達は何やら啞然とした様子になっている。

当然そんな様子などどうでもいい龍子は、思い直したように、言葉が続ける。

「あら、ごめんなさい。私としたことが、まずは自分が名乗るのを忘れていたわね。ふふ、そんな当たり前の常識すら忘れるなんて、本当にどうかしていたわね。私は滝川龍子、たきがわりゅうこ龍子と呼び捨てでいいわよ。それで、あなたのお名前は？」

「……っ！？わ、私は、そ、その、ゆ、優子。いなもりゆうこ稲森優子ですっ！！」
思わず龍子の優しい微笑に見惚れていた優子。

他の者達も、教室の全員が思わずと言った感じに見惚れている。

ちなみにこの後、教室の男子の殆ど全てが龍子に告白し、バツサリと振られる事になるのだが、余談である。

ともあれ、見惚れ、思わず一瞬沈黙に陥っていた優子は、慌てたように、つかえながら、ようよう自らの名前を名乗る。

満足げにうなずく龍子。

「そう、優子っていうの……あら？ごめんなさい。呼び捨てにしてしまったけど構わない？」

「え？……は、はいっ……！」

「ふふ、そんなに畏まらないで。同級生なのに、可笑しいわよ。でも良い名前ね。あなたにピッタリの優しい雰囲気の名前だわ」

「そ、そんな事は……」

思わずといった風に、顔を俯け暗い雰囲気醸し出す優子。

だが龍子は世辞など言ったつもりは無い。

紛れもない本音であった。

実際、彼女の包み込むような雰囲気には、良く似合った名前だと思っ

ただ聞いただけで、彼女の名の漢字すら容易く予想できてしまったほどだ。

後から確認を取り、その漢字で正解だったと分かった時にも、当然とは思わなかった。

なのでむしろ、この暖かい空気を理解できない者達がおかしいのだと思う。

だから、僅かばかり腹が立った。

自らに対し、あまりに自信を持たない優子の態度に。

当然、そうなるまでに、色々あったのは予想は付く。

それでもだ、彼女は自分と同じ様に自らに自信を持つに値する価値がある存在だと思うのだ。

だから当然のように告げる。

「それじゃあ優子、知り合えて嬉しいわ。それで早速知り合いとして最初のお願いがあっていいかしら？」

「え、は、はいっ！！なんででしょう龍子さん！！」

「んー、とりあえずお願いの前に命令ね。龍子さん、なんて呼ばないで龍子と呼びなさい」

! ! ?

お願いと聞き、ビクリとして、縮こまってしまった優子。

だがそれより龍子が気になったのはその呼び方だ。

「さん」などと他人行儀に過ぎる、だが柔らかい言い方では直させるのに苦労しそうだ。

始めの一步でそこまで手間取るつもりはない。

だから命令した。

自らを龍子と呼べ、と。

途端、ますます困惑し、キヨ口キヨ口とし出す優子。

周囲の者達は、龍子が醸し出す空気に吞まれ、沈黙している。

一部の者達……後にくれた少女達として知られる小杉達のグループと分かったが、彼女達は何やら優子にガンをくれていたが、龍子が圧倒的な眼光で睨み付けると、途端ビビッたように、視線を逸らした。

そのまま、柔らかな視線を優子に向ける龍子。

優子は、暫し、何やら迷うように葛藤していたが、ようよう言葉を搾り出した。

「え……と、その、りゅ、龍子……？」

恐る恐るとした、及第点とも呼べない呼び方だったが、まあそこから辺は今後の課題とすればいいと、龍子には内心考えて、頷いた。

「はい、良く出来ました。それじゃあ次は最初のお願いね。優子、私と友達に、いえ、違うわね、私の始めての親友になつてくれないかしら？」

[illegible]

最初、勢いで返事をして、その後意味を理解し、思わずといったように叫んでしまう優子。

周囲の者も、特に龍子を以前から知る者達はどよどよとざわめい

ている。

当然だ。

然程に人望も厚く、誰からも好かれながら、友人は多くとも、誰に対しても一定の壁を作り距離を置いてきた龍子。

その龍子が誰かに親友になってくれなどと言っただけでも驚きのだ。

しかもその相手が、見た目は明らかに野暮ったく、雰囲気も暗い、新しく始まったばかりのクラスでも、これからも目立たないだろうと明らかな少女と来ている。

その驚きは周囲にも伝染し、いつの間にか、クラス中がざわめきに包まれていた。

当然、龍子はそんな周囲の様子など気にしない。

そもそも気にするにも値しない。

彼女が認めてもいない者達の騒ぎなどにいったいどれほどの意味があるというのか？

いや、当然、そのような者達も使えるのならば、使ってみせてこそこの滝川龍子だが、今回はそのような事どうでもいい、何しろ自らが認めるに値する親友ができるかどうかの瀬戸際だ。

そして当然、龍子は優子に逃げなど許さなかった。

最初の勢いでの変事。

それをあっさりと利用してみせる。

「ふふ、ありがとう。そんなに大きな声で『はい』と言ってくれるなんて嬉しいわ。それじゃあ今日から私達親友ね、これからよろしくお願いね、優子」

「え？えと、あの？そうじゃなくて、龍子さん？」

「龍子」

「え？」

「だから、『りゅうこ』よ、呼び捨て。忘れたの？」

「あ、えと、その、りゅ、龍子？わ、私そうじゃなくて……」

何とか言い訳しようとする優子。

だが、そんな事で逃す程に龍子は甘くない。

どこかわざとらしく、悲しげに言ってみせる。

「あら？私、優子とはとても深い仲の親友になれると思って、お願いを聞いてもらえて喜んでいただけれど……私の空回りだったのかしら？優子は私なんかが親友じゃ、嫌？」

「そ、そんなことはっ！？」

「良かった、それじゃあやっぱりこれから私達親友ね」

龍子のあまりに悲しげな様子に、思わずといった感じで叫んでしまふ優子。

と龍子はコロツと表情を変え、嬉しげにそう言つてのけた。

流石に鈍い優子も理解する。

今のは芝居だったのだと。

だが何故か不快ではなかった。

今まで悪意のある嘘に騙され続けてきた優子。

それに対し、今の龍子の嘘に、そのような悪意など微塵も含まれていなかったからだろうか？

なんにせよ、彼女には圧倒的な華があった。

こんなやり取りでさえあっさりと吞まれてしまふ程に。

本当に凄い人だと思う。

そんな凄い人と自分が親友だなどとおこがましいという自己卑下
が当然のように浮かぶ。

何故、自分なんかに、そんな凄い人が、こんなに構ってくるのだ
ろうか、とも。

だが、裏が無いのは分かる。

違う、そもそも彼女には裏など必要無いのだ。

彼女のような人が自分程度を騙して何になるというのだろうか。

ならば、彼女は本当に自分程度と親友になりたいと思ってくれて
いるのだろうか。

それに、今まで散々騙され続けて来た事で、鋭く嘘を見抜けるよ
うになった自分の経験も、彼女の言葉に嘘は全く無いと、そう言っ

ている。

不可解ではあった。

だがそこに嘘は全く無い。

そこに悪意も欠片も無い。

紛れも無く、純粹に、単純に、本当に、彼女は自分などと親友になりたいとそう言ってくれているのだ。

駄目だ。

今まで徹底的に積み上げて来た自己防壁が、揺らぎ崩れ去っていくのを感じる。

彼女の前ではあまりに無力に過ぎた。

彼女に惹かれる自分も感じる。

ただ凄い人だから、というだけではない。

何故か、本当に、理由も分からないが、彼女と自分は噛み合う。

そんな、傲慢だとは思えない事を、だけど真実だと、感性が言っているのだ。

こんな事は始めてだ。

今まで自分の何にも自信を持った事などない。

自分などの存在に価値があると感じた事もない。

それでも、この龍子という少女との絆だけは、掴み取らなければいけないと、そう本能が囁いていた。

そして今までにない程にハッキリと、透き通った言葉が、しっかりと口から吐き出される。

それは優子自身が驚きを感じる程の物で。

「うん、分かった。よろしく龍子」

周囲の優子をよく知る者達。

特に優子を力モとして、それでも優子がその自信の無さの故に、決して逆らえず従っていた小杉達。

誰もが驚愕の表情を顔に貼り付ける中。

龍子は、ただ一瞬目を丸くすると、すぐに、女の優子ですら見惚れる程の華のある笑みを浮かべ。

「ええ、よろしくね、優子」

そうしてその日、滝川龍子と稲森優子という、周囲から見れば異色とは思えない、アンバランスでチグハグな。

だけど本人達にしてみれば本当に何か歯車が噛み合ったような。そんな親友関係が生まれたのだった。

…… またも、自分の思考が過去へと回帰していた事に気付き、龍子は苦笑する。

悪い気分ではない。

いや今でもあの日の事を思い出すと、心が温くなる程で、それは良い事なのだと自分でもそう思う。

だが、今はそんな場合では無いという事を理解しているが故に、そのような心地良い思い出に逃避する自分を叱咤する。

とはいえ、何か対策がある訳でも無い。

実際、情報を集めたとはいえ、信憑性も怪しく、使える情報は1割もあれば、良い方か。

何より、その使える情報を使う機会すら今は訪れていない。

既に道具は無い。

自らの肉体一つでアレに対抗できるなどと思う程龍子は馬鹿ではない。

場所も悪い。

ただの狭い学校の廊下。

こんな場所に一体何がある？

使える物など何一つ調達できない。

それでも今はただひたすら逃げるしかない。

起死回生の一手と成り得る何かが、何時か現れると信じて。我ながら、そんな運任せの逃走など柄じゃないとは思う。

それでもこれが、今の龍子の精一杯だ。

あまりの不様さに、唇を噛み締める。

だが、と思う。

こうやって逃走を続けられている事、それ自体が異常なのだ。

あれの動きには、明らかに物理的な束縛など生じていなかった。つまり、アレがあんなにもとろく、自分が逃走を続けられているのには何か法則があるのかもしれない。

尤も、自らの恐怖を煽り立てる、その為の手段という可能性も捨て切れ無いが。

考える、考える、考える。

無数に集めた情報、そして過去にあった事件。

それらから、アレの本体と呼べる者は、過去の理科室で、硫酸を顔に被るという事故により顔を無くして、それを苦に学校で自殺したという先輩だという説が、最も可能性が高いと龍子は踏んでいた。アレの性質については、その生まれ故に、愚かにも儀式を行った者を次々と学校に招きよせ、その顔を喰らい、そして尚顔を求め続ける化物だというのが正解だと思う。

先程のあの顔の集合体とでも言うべき姿を見た結果、その説が正しい可能性が高いと龍子は踏んだ。

尤も、これらの情報は、裏の方の物で、表立って知る者はあまりいない情報だ。

顔無し様とは、自らの醜さを苦に死んだが故に、儀式を行った者の顔を美しい物に変えてくれる神になった人。

顔無し様の儀式とはその為の儀式だと、表立った噂ではそうなっている。

犠牲者が山ほど出ながら、未だにそんな噂がまかり通っている理由は、学校が存続し、警察組織が動かないのと同じ事。

龍子が調べた結果、この儀式の犠牲者と見られる者は皆、周囲の者が何も把握していない素行不良者ばかりだからだ。

素行不良なのに、美しい顔になりたいとか思っていたんだな、などと考えると笑いそうになるが、自重する。

流石にどのような者であれ、死者に対する冒瀆など許されまい。

ふと、もう遅い話だが、アレのような存在が現実にいるのであれば、除霊師だのなんだの名乗ってる人間を雇うという選択肢もあり

だったかと考える。

だが即効否定した。

少なくとも、龍子が調べられた範囲でのそういう人間は、皆、偽者だと思えなかった。

アレのような存在がいる以上、本物もいるのだろうが、それこそその本物も、世界の裏とやらに居るのだろうと思う。

全く以って上手く無い、と舌打ちするしか無かった。

体力の限界を超える程に走りながらも、打開策を探し、未だに色々と思いを巡らせる龍子。

その不屈の精神力は賞賛に値する。

だがどれほどの精神力があっても状況に変化を齎す事はできない。そう思われた時だった。

ふと、龍子は違和感を感じる。

周囲に並ぶ教室の配置が変わった。

いや、違う。

ゾッ、と背筋に寒気が奔るのを感じる。

理科室。

恐らくはアレが誕生する切っ掛けとなった場所。

それが廊下の片側に鎮座していた。

恐る恐る手を伸ばし、理科室のドアをスライドしてみる。

ガラガラッと音を立て、ドアはあっさりと開いた。

ビンゴだ。

他の教室の扉が全く反応しない中、本来なら鍵が掛かっている筈なのにあっさりと開く理科室の扉。

しかも恐らくはアレにとっても特別な場所。

逃走に逃走を重ねた末に辿り着いたのがココ。

状況的に、明らかに誘われていると思えない。

確かに、ここは、アレに対し有効な武器が眠っているかもしれない場所ではあるのだ。

だが状況から推論に推論を重ねると、絶望的な結論しか出なかつ

た。

しかし虎穴に入らずんば虎児を得ずとも言つ。
いいだろう。

誘つているというのならば誘われてやろう。

ほんの僅かでもいい。

勝機があるのならば、そのチャンスを掴んでみせる。

戦いもせずに死ぬなど、滝川龍子にはあり得ない死に方だ。
もし死ぬとしても、最後の最後まで戦い抜いて死んでやる。

勿論、当然、生き延びる事こそが最優先事項なのは変わりないが。
恐怖の中で、それでも尚笑いを浮かべる龍子。

そう、冗談では無い。

誰かに負けるのもそうだが、何より自分自身に負けるなど、己自身
の尊厳が許さない。

紛れも無い自身の内に生まれている恐怖の感情。

理科室の内より漏れ来る得体の知れない空気。

それらすらも笑い飛ばして、龍子は力強く、室内へと一步を踏み
出した。

理科室の中へ入った龍子は、自分が決して冷静では無かったのだ
と思い知り、慌てて理化準備室へ繋がるドアを開けた。

こちらにもまたやたらとアッサリと開く。

だが、これ以上の考察は無駄だ。

龍子は薬品を管理してる棚を開く。

これもまたアッサリと開くが、考察は無し。

そのまま目的の物。

当然硫酸を探し出す。

あっさりと見つかり、龍子はそれを手にしていた。

この事実がますます龍子が誘導されているだけという推論の信憑
性を高める。

だがそれでも、相手は条理を越えた化物。
これに賭けるしかないのだ。

勝率のあまりに低い賭け。

それでも勝率があるだけ、まだいい。

勝つてあの子に、優子に説教してやる。

それこそが今の龍子を支える尤も強いモチベーションだった。

ガタリ。

ずるずるずる。

おおおおおん。

隣の理科室に、あの何かが這いずるような音と、奇妙な響きが聞こえる。

理科室のドアなど通れるようなサイズでは無かった筈なのだが。

これだから化物は、と悪態を吐きつつも、覚悟を決める。

これが最初で最後の賭けだ。

本当に本気で全てが決まる。

龍子の全てがこれに掛かっている。

こんな勝算の薄い賭けに出るなど、生まれて始めての事だな、と龍子は恐怖を押し殺し、今までで一番の笑みを浮かべてみせる。

例えどれほどに無謀だろうと。

例えどれほどに愚かだろうと。

彼女が、滝川龍子が滝川龍子である事だけは、誰にも否定させない侵させない。

最後の最後まで滝川龍子は揺らがない。

そして、一瞬であっさり覚悟を決め、龍子は理科室へと飛び込んだ。

目に飛び込んでくるその異形。

顔、顔、顔、顔、顔、顔、顔……。

人体のあらゆる器官と組織や血肉がミキシングされた得体の知れないモノ。

だが、既に覚悟を決めた龍子は揺らぎもなかった。

ただ手に持った瓶の蓋を開け、そのナニかへと硫酸を振り掛ける。
ぐおおおおん。

苦しむかのような呻き声が上がる。

しかし龍子はここで、やったなどと快哉を上げる事は無い。

ただただ冷静に冷徹に、相手を観察し続ける。

硫酸を被る事によって焼け爛れた複数の顔。

それらが再生していき、今までになかった憤怒の形相へと表情を変える。

ぐるるるうううおおおおおっ！！

今までにない、怒りのような響きが周囲へと拡散する。

それでも尚、龍子は冷静であつた。

賭けに負けた。

ただその事実を認めるのみだ。

予想はしていた事だ。

だがクリア条件の無いゲームなど卑怯に過ぎるのでは無いか、とは思つ。

龍子は笑みを浮かべ、泰然と待ち構えた。

ナニかはその姿を更に異形に変え、膨張させ、龍子を呑み尽くさんと、覆いかぶさろうとしてくる。

だが、恐怖など見せてやらない。

泣いてなどやらない。

悲鳴など上げてはやらない。

最後まで龍子は龍子であり続ける。

それが龍子の矜持だ。

ただ……。

最後に一つだけ思う。

せめて優子だけは助けてやりたかった、と。

果たして、こいつの内部から、こいつの行動の主導権を奪ってやる事は可能だろうか考える。

——そいつは無理だろうな。

あら？どうして？

——そもそもにして意識の絶対量が違う。

ふうん、それは困ったわね。私としては絶対に優子は助けたいんだけど、その程度精神力でどうにかならない？

——くくつ、お前がそんな奇跡を起こせるというのであれば、お前こそが俺の求めていた人間という事になるが。……しかしお前は面白いな。自らの死の間際にもただ己が親友の事を心配し続けるとは。

ふと、龍子は自らの心の声に、誰かが答えて会話になっている、そんな奇妙な事実^{事実}に気付く。

あなたは誰？

思わずまたも心の声で尋ねた龍子に、はたして答えは返って来る。

——ふむ、俺か？俺は悠久の昔よりの世界と人間に対する怨念と怒りの塊、ただそれだけが顕現しただけの存在。だが俺という個を呼ぶのであれば怨龍^{おんりゅう}。そう呼ぶのが正解か。

怨……龍……？

——まあな、だがそれはどうでもいい事だ。さて、俺はお前の魂の強い輝きと真摯な願いに呼ばれ、お前と交信を持つに到った訳だが……お前の願い、それはその優子とかいう親友を助けたいという事で間違いないな？

ええ、それはまあそうだけど。どうせなら、私も一緒に助けたりとか出来ない訳？

——ふふん？すまないな。一応俺も今はこの世の理に縛られる身、今の状況であればお前と交信するのがせいぜいだ。

あら？大層な名の割に思ったよりも大した事ないのね。

——はははつ、全くその通りだ！俺もそう思うよ。実に痛快だなお前は、俺としてもむしろお前のような者こそを助けたいと思うのに、前提として俺を呼び出せるのがお前のような者だというのだから矛盾だな。お前のような者ならば俺が望む奇跡すら起こせるかもしれんのかな。

まあ、いいわ。言ってる事が良く分かんないし、ただ一つだけ確認。あなたは優子を助けられるの？

——当然だな。俺をそこに居るような、数え切れる範囲の怨念の塊と比較になると思うな。悠久の刻とあらゆる世界の不条理が育んだ怨念と怒りの塊、それが俺だ。その程度の雑魚、瞬殺してみせるさ。ただし代価は頂くがな。

ふう、当然ね。世の中ただで何かをしてもらえるなんて甘い話は無いものね。それでその代価というのは？

——お前の魂を俺に喰わせる事、ただそれだけだ。
あら？でも私ってこのままだといいつに喰われちゃうんじゃないの？

——問題無い、俺はそいつごとお前を喰らうだけの話だからな。当然お前の魂は特別扱いだがな。だが……。

だが？

——正直、そいつの中に居た方がまだ生温いと思える程の地獄、俺に喰われたならばそれを味わう事になると宣告しておこう。死など生温い、空前絶後の、お前の想像の範疇になど無いだろう苦痛だ。さて、それでもお前はそれだけの代価を支払い親友を救う事を望むかな？

当然ね。

——ほう？……それは、何故だ？

それが私だからよ、滝川龍子っていうのはそういう人間なの、覚えておきなさい……怨龍さん？

——く、くくくつ、はーっはっはっはっはっ！！良からう、お前との契約、今この時を以って成立した。そのくだらん雑魚の中で待っている、俺がお前を喰らいに行くその時を。当然契約だ、お前の望み通り、お前の親友は救ってやる。お前の親友“だけ”はな！！
……ああ、なるほど、そういう事ね。

——不服か？

いいえ？私も優子の事以外なんてどうでもいいもの。ただ、本当に、約束は果たしなさいよ、怨龍！！
バクリ。

最後に、途轍もなく強い思念を以つて脅しを賭けた龍子は、そのままナニかに喰われた。

メキメキ、ゴリゴチ、ブチブチ、ゴリュゴリュ……。

血肉が骨が磨り潰され喰らわれる、
得体の知れない、気色の悪い
音が響き渡る。

圧倒的な苦痛と肉体がバラバラにされる気色の悪い感触、様々な負の思念に晒されながら、それでも龍子の精神だけは己自身を保ち続ける。

あまりにも強大な精神力。

だが十二かはそんな異物にも気付けない。

そしてナニかはふっと消え去り、共に、明らかな異空間、それが消失していく。

そんな中、そのナニかですら認識できない遙かなる深淵。

そこに笑い声が響き渡る。

——くくくくくつ、はーはっはっはっはっはっ！この俺に脅しを掛けるか！？しかも自分が喰われるその瞬間に！！最高だ、最高だな、お前は！！お前が俺を滅ぼす奇跡を起こす俺の敵となれなかったのは実に残念だが……待っている！！今すぐお前を喰らいに行つてやろう！！

そしてこの学校にて起こる悲劇の全てが始まった。

2話（前書き）

「シーカー」「王剣」「恋愛遊戯」の最新話も更新したので読んでもらえると思います。

2話

私立白無高等学校は奇妙な学校である。

私立でありながら決して学費は高くない。

勿論私立として考えたらの話ではあるが。

それに見合つて当然学校設備も国公立の高校に毛が生えたようなものである。

対し何故か学業の指導者や部活の指導者としては非常に優秀な教師陣と、全国での類を見ない程のデザインの凝った女子の制服を採用している。

男子がごく普通の学生服だが。

これらの事から一時は女子の受験生が殺到し、凄い倍率になったという事だが、男女比をほぼ1:1から崩した事は一度も無い。

設立者がいったいどんなコネを持ち、どんな趣味をしているのか、そして何を望んでこの高校を設立したのか。

設立者の顔も全く見えてこない。

勿論一般的に公開されている情報なら知る事は出来る。

だがそれでもあまりにも曖昧模糊とした印象が拭えないのだ。

そして設立してから暫く。

奇妙な噂が囁かれ始め、そして実際に行方不明者が出るようになり始めた。

しかも結構な頻度である。

この程度の私立高校などそれこそすぐに潰れてもおかしくないほどだ。

だがそこもまた奇妙な話がある。

一時はとんでもない倍率に跳ね上がった受験者数。

だが、何故か、この高校は開設当時からずっと、生徒達が三つの大きなグループに別れていた。

一つはあらゆる方面で優秀さを発揮する生徒達。

教師陣の優秀さもあいまり、彼らの有名大学への進学率は異常な程で、また部活での彼らの活躍も著しく、教育熱心な富裕層のこの学校への支持は高く、それがこの学校を護る壁となっていた。

一つは素行不良で知られ、反社会的な行動を繰り返す生徒達。

様々な問題を起こし、処罰はされるが、何故か退学になるような事はなく、何事もなければそのまま高校卒業の資格だけをお願い、そのまま去っていく。

ただ、行方不明者となるのは、大抵このグループの生徒達である。だが周囲から素行不良者として知られ、普段から無断の外泊などを繰り返している彼らが何も残さず唐突に行方不明になっても、そこに事件性を見出すのは難しく、また家族でさえも彼らを疎み、積極的な捜査を望む声が上がらない為、大きな事件として扱われる事は無く常に自然消滅していた。

最後に、その素行不良者のグループに力モにされる、所謂虐められっ子といわれる生徒達。

非常にネガティブで、消極的で、決して彼ら素行不良者に逆らえず、金銭などを良く集られている。

彼らもまた、そのように暗い学校生活ではあるが、何事もなければそのまま卒業して、勿論成績によつては進学していく、そのような生徒達だ。

このグループからも時折行方不明者は出ていた。

ただ、このグループの者が行方不明になるのは、毎回素行不良者のグループの者と同時期なので、むしろ素行不良者のグループの者が何かに巻き込んでないかと疑われる事が多く。

また、このグループの者達がそのような暗い性格になったのは、何故かこの学校の生徒に限っては家庭環境に問題がある者達ばかりが集まっている為、素行不良者のグループと同じく、家族が積極的
に捜査を望まない為、この場合も大きな事件として扱われる事は無く、常に自然消滅している。

だが、そもそもにして奇妙ではなからうか。

このような三つの共通点の無い生徒達のグループ。彼らがグループと分けられる程、均一に、同じ学校に集まっているという事。

しかも優秀な生徒達を除いた他のグループの家庭環境の共通性。まるで全てが誰かがそのように仕向けているかのようである。

優秀な生徒達のグループは世間に対する隠れ蓑のようでさえある。ある三流オカルト雑誌の記者が、記事に乗せた事がある。

この学校は、まるで世間に隠れて作られた餌場のようなと。当然、その餌とは行方不明者達の事だ。

三流オカルト雑誌とはいえ、その不謹慎さに抗議が来た。

だが三流オカルト雑誌だけに誰も本気にする事はなかった。理不尽な事だ。

何にせよこの学校が、傍観者として冷静に観察したならば奇妙な事には変わりはない。

そしてこの前、ついに今までになかった例外が起きた。

第一のグループ、優秀な生徒達の中から行方不明者が出たのだ。しかも一年生の中では紛れも無くトップ。

いや、歴代の生徒達を鑑みても異例な程に優秀な生徒であった。

滝川龍子。

それがその行方不明となった生徒の名前である。

学校の4階、1年の教室が立ち並ぶ廊下にぶちまけられた龍子の鞆とその中身。

何故か1階の理科準備室から紛失した硫酸。

事件性は十分であった。

そして龍子の家族も当然の様に積極的に捜査を願い出た。

警察も動き出す。

それから暫くは学内も騒然としたものだ。

様々な者から事情聴取なども行われ、様々な捜査が行われた。始めての事だろう。

警察が本気で動いたなどというのは。

だが動いた結果がお粗末だった。
あまりに不可解に過ぎる。

それだけしか分からなかったのだ。
勿論警察は熱心だった。

何せ以前から行方不明者が多い事で知られる学校だ。

事件性が無いという事、家族が熱心でないという事から放置されて来た。

だが今回は事件性も高く、家族も熱心なのだ。

これほどの機会など滅多に無い。

徹底的に調べ上げた。

だが、出てくる手掛かりが、全てバラバラ。

あまりにも整合性が取れてない。

全然繋がらない。

聞き込みをしても、龍子という生徒に問題が起きる要素が無い。

生徒達からは顔無し様などというオカルト話が出てくる始末。

流石にそれは笑って黙殺したが。

学校での捜査は限界だった。

これ以上は学業の妨げになると、設立者側からも強く抗議が出ていた。

仕方無く警察も、学校からは引き上げるしか無かった。

勿論今でもいくつか出てきた手掛かりを元に、また外で出来る捜査は続いている。

家族もまた、今でも熱心に動いている。

だが、それだけだった。

何も新しい動きは無い。

結局、オカルト雑誌に、また新しい記事の種が増えただけ、という有り様であった。

学校内も一時は騒然としたものの、今では落ち着いている。

あれだけ学校でも一際目立ち、誰よりも優秀だった龍子という生徒が消えたというのに、今では誰もが忘れ去ったかのように話題に

しない。

いや、優秀な生徒達の一部などはライバルが消えたと喜んでいるかもしれない。

でも、話題にしないというのは逆に、龍子という少女の人間性の優秀さを表しているとも言える。

普通どれだけ優秀で周囲と交流を持っていた生徒であっても、こんな事件となれば、面白おかしく話題にする者が誰かしら居る筈なのだ。

だが、滝川龍子という少女に限ってはそれが全く無い。

話題にしないという事も、逆にそのような、ゴシップの種にするのを避けているようにさえ思われる。

そう、滝川龍子という少女は、この学校においてある意味神聖視さえされていた。

それほどまでに、異常と言ってもいいほど優秀で人格にも優れた少女だったのだ。

始め彼女が行方不明になったと聞いた時、本気で泣いた生徒がどれほど居た事か。

今、話題にしないというのは、忘れようと、そう意識しているのだろう。

本当に龍子は凄いなと、彼女の親友であった稲森優子はそう思った。

ただそれでも誰もが龍子の事を忘れたように振舞うのは寂しいとも思ったが。

今でも彼女が自分の親友だったなどと信じられない。

そう思う。

それほどに凄い少女だったのだ、彼女の親友は。

親友。

その言葉を思っただけで胸が温くなる。

本当に彼女と共に在った日々は、常に楽しくて嬉しくて誇らしくて。

だから、仕方の無い事だとは分かっていても、この龍子の事を忘れたような日常が寂しくなる。

本当なら龍子の事についてこの場で喚き散らしたいくらいだ。

そんな事できる人間ではないのだが。

そう考え、自分の親友に比してのちっぽけさに悲しくなる。

彼女なら、龍子なら、納得のいかない事ならば、どんな相手にも状況にも立ち向かっただろうと。

そして戦女神の如く凛々しく美しい彼女の姿が思い浮かぶ。

本当に綺麗な少女だった、龍子は。

自分の事を、龍子と同じくらいの素材を持っているなどと煽ててくれていたが、自分はある風には一生成れないと、優子はそう思う。

優子は自虐する。

だが、そんな事はないのだ。

性格については確かにそうかもしれない。

だが龍子が言った様に、稲森優子という少女は容姿の素材だけならば紛れも無く滝川龍子という少女に並ぶ、超一流の素材であった。それを完全に放置して、無駄にしているだけで。

あまりにも勿体無い。

見る目がある者が居ればそう言うだろう。

そついう意味でも、龍子は人を見る目すら超一流のものを持っていた。

ふと優子は教室を見回して思う。

私、本当に1人になっちゃったな、と。

龍子に出会う前、優子は親友どころか友人と呼べる者もいなかった。

だが構ってくれる者はいたのだ。

小杉紗枝やその手下のように付いて回るグループが。

全部で5人程。

勿論優子とて分かっている。

常に優子は金銭を集られていた。

優子の家は、両親共働きで、家を省みる事もなく、昔から優子は放置されていたが、ただお金だけは貰っていた。

それで親としての義務を果たしたと思っていたのだろう。

そういう人達なのだ。

あの父と母は。

だから小杉さん達のグループに目を付けられた訳だけど。

それでもいいんだと、優子は思っていた。

そう、滝川龍子という少女に出会うまでは。

彼女との出会いは鮮烈だった。

入学式のあの日、教室での突然の親友宣言。

周囲を気にせずどこまでも突き進む少女。

だけど誰もが惹かれる、憧れる。

自分や他の弱い生徒達だけじゃない、あの小杉さん達でさえ、そして他の素行不良の生徒達でさえもそうだった。

他の優秀な生徒達も、負けて悔しいとは思っていただろう、いなくなつた事でライバルが減つてほつとした者もいるだろう、それでも彼らでさえ龍子という少女に対し負の感情は抱けず、ライバルが減つてほつとしながらも、そんな自分を嫌悪してしまっているだろうと思える、それほどに眩い少女だったのだ。

そんな龍子に親友と認定され、散々振り回された。

だけどちつとも嫌じゃなかった。

いや、むしろ本当に楽しかった。

どうしても龍子のいうようにお洒落をしたりなど、自分に自信の持てない優子には、怖くてできなかったけれど……。

それに小杉さん達と完全に手を切る事も出来なかった。

これも全て自分の弱さが原因だ。

そしてあの顔無し様の儀式に手を出した。

そう、龍子が、行方不明者の原因という噂が裏で流れていると調べてきた顔無し様の儀式に。

理由は小杉さん達に誘われたからだ。

でも優子は分かっている。

自分は望んで参加したのだと。

そう、少しでもあの龍子という少女に釣り合える人間になりたいと、そう願った結果、拒否どころか、本当は積極的に参加したのだと。

そんな自分を止められないと分かった龍子ちゃんは一緒にあの儀式に参加した。

いや優子はこう思う、龍子ちゃんなら本気になれば止められるけど、敢えて自分の心情すら汲んで、ただ小杉さん達に自分が集られる事の無いように一緒に参加してくれたのかもしれないと。

実をいうと小杉紗枝とそのグループも龍子の前ではかなり大人しいものだった。

龍子は自分にビビっていたのだろうと勘違いしていたが違う。

小杉紗枝もそのグループすら、当然のように龍子に心酔していたのだ。

だから、優子に集ると言っても、龍子が優子に親友宣言した後は、本当に困った時に小遣いをせびるような、そんな随分と弱々しいものになっていた。

龍子は気付いていなかったが。

ただ自分がいると大人しい、だから優子と小杉紗枝達が一緒に居る時は自分も一緒に居る、出来る限りそうしてただけだ。

尤も、それがますます小杉紗枝達が優子に構う原因になっていた事にも気付いてなかったのだらう。

どもあれ、顔なし様の儀式、それについて調べてきた龍子の情報。勿論優子は聞かれた時、警察にそのまま全て話した。

当然本気になどしていなかったようだが。
当たり前だ、優子とて今となっては恥ずかしい気持ちになっている。
る。

何故あんな話を警察にしてしまったのか、と。

だが、小杉紗枝達のグループは違う様だった。
憧れの対象だった龍子を自分達が犠牲にした。

そして次の犠牲者は自分達かも知れない。

そのような理由で、学校からなるべく離れ、当分の間、遠くの同じく素行不良な仲間の家に泊めてもらうのだという。

その後の事は考えていないが、とにかくここからは離れなくちゃいけないと、そう思うのだと。

恐らくは自分が龍子の親友だからなのだろう、そんな事まで話してくれてから、小杉紗枝とそのグループは、学校に来なくなった。

だから、先ほども思ったように、優子は本当に1人だ。

誰もが気に掛けない、誰もが気に留めない、そんな存在。

今となってはただこう思う、全部龍子ちゃんの言うとおりにしておけば良かった、と。

それはあまりに行き過ぎた依存だと優子は気付かない。

だから、その度に思う。

そんな、本当に龍子ちゃんが帰って来ないかのような事を考える自分は馬鹿だと。

そうあの少女がこの世から居なくなる？

そんな事がある訳がない。

確かに今、彼女は行方不明だ。

状況を考えれば、何か大変な事に巻き込まれているのだろう。

流石に顔なし様の儀式がどうこうなんてそんなオカルト話は全く関係無いに決まってる。

これに関しては何故小杉さん達はあんなにビビっていたのかと、そう思う。

そして思うのだ。

彼女だったら笑いながらそんな状況さえも切り抜けて、胸を張って堂々と再びこの教室に入ってきて来るに違いないと。

そう胸に確信を抱き、笑う優子。

途端、ガララツと音がなり、教室の前方のドアが開いた。

思わず顔を上げ凝視する優子。
人が入ってくる。

だが思わず優子は頭を下げた。
男だった。

40代半ば程の中年の男。

髪はまだふさふさで、短めに切り、色濃い黒さを保っている。

体型も中年太りなどしておらず、スーツに包まれた肉体は実にスマートなものだ。

足も長く、スタイルも良い。

目は切れ長でその黒眼は眼光鋭く常に周囲を見据える。

髭も常にきつちりと剃り、そのスラリとした顔のラインといい、ハンサムと言っていい男だろう。

だが特に人気の教師という訳ではない。

勿論嫌われてる訳でもないし、授業が下手な訳でもない。

これでも担任としてはきちんと面倒見が良いと言われているし……
尤も、何故かこの学校の教師全員に共通して虐め関係に関しては全く無関心なのだが……数学の教師として実に分かり易い授業をすると言われているし、かなりの成績を残しているサッカー部の顧問でもある。

だがこの学校ではそれで普通なのだ。

学校の設立者が集めている優秀な教師達。

彼らは皆、男も女も誰もがそれなり以上に見た目が良い。

それに誰もが優秀でどの科目の教師も分かり易い授業をする。

更に部活の顧問を務める者は皆優秀な指導者であった。

それが普通。

この学校の普通。

ふと優子は気付く。

いや何故今まで不思議にも思わなかったのかと。

そう、この学校に集まっている教師陣。

彼らは他の学校なら間違いなくその優秀さで知られ人気の教師と

なるような、そんな教師ばかりだ。

何故そんな教師がこの学校にこんなにも集まっているのか。

確かに優秀な生徒達は常にかんりの結果を残してはいる。

だが、これ以上の学校は他にいくらでも存在する。

だいたい学費の安さや設備の普通さからいって、そんなに教師達に特別な給料が与えられてとは思えない。

しかも連続で行方不明者が出る事といい、色々と問題もある学校だ。

何故彼らは敢えてこの学校を選んだのか。
いや違う。

彼ら教師達には何ら不審は感じないのだ。
不思議に思うのならここだろう。

彼らをこの学校に連れてきたこの学園の設立者とはいったい何者か？

そうだ、何故誰も不思議に思わないのだろうか？
確かに申し訳程度の一般的な情報は公開されている。

だがこれほどの手腕を発揮している設立者。

未だに厳然とこの学校の質を保っている人間。

何故申し訳程度の情報で済んでいるのだ？

何故全く注目されていない。

こんな事件があつてさえも、警察の事情聴取も最低限のやり取りで済ませたらしいと聞く。

そして、そんなおかしさに気付かない自分達が一番おかしい。

さらに、何故今になって自分はそんな事に突然気付けたのか？

——まあ、サービスだ。
え？

突然、何者かの声が聞こえた気がして、優子は辺りを見回す。

だが優子に声を掛けた素振りのある者など誰もいない。

むしろいきなりのそんな優子の行動に訝しげな視線が向けられる。
急に恥ずかしくなつて身体を縮め、俯く優子。

もう声は聞こえない。

恐らくは空耳だったのだろう。

龍子の事で何か過敏になっているのだろうか、自分で自分を恥じ入る。

優子が1人でそんな寸劇を繰り広げている間に担任の話が大分進んでいるようだった。

慌てて続きを聞こうとする優子。

ちょうどそのタイミングで、教師は驚くような事を言い出した。

「えー、それでは、突然で何なんだが、転校生を紹介する」

途端、教室がざわめく。

当然だ。

優子もまた驚いた。

2学期も後半、というのはまだ1年生という事を考えれば許容範囲だ。

だがあまりにも突然過ぎる。

何の事前情報も無かった。

少しぐらいはこういう事は、耳聡い者などが聞き付けていたりするものだし、それでなくても迎えに行く前に事前に教師から知らせておくぐらいはするものだと思うが。

少なくとも、そんなサプライズなどと、ふざけた真似をするような教師はこの学校にはいない筈だ。

実際教師自身もどこか困惑気である。

「いや、お前等が驚く気持ちも分かる。実際あまりに突然の事で先生も驚いたからな。だが、ここだけの話だが、あまり問題を起こさなくてもくれよ?」

途端教師が小声で、教室の生徒だけに聞こえるように話し出す。

その威厳を保つ為か、どこかユーモアは感じさせつつも、だが真剣な表情と声色が見て取れる。

「まあ先生も、職員室を出る時に他の先生から軽く忠告された程度なんで、ハッキリした事は言えんのだが、この生徒、どうも編入に

際して試験も何も無しに強引に押し通したらしくてな」

あまりの事にまでも教室がざわめきかける。

優子も驚きの声を出しそうになった。

だが事前に察していた教師のしーっ、という人差し指を立てたジエスチャーに、生徒達は、なんとか大声を出さずに済ませる事ができた。

「だからこそ先生にとっても突然の話になったって事なんだろうが……ハッキリ言ってドラマじゃないんだ、こんな無茶苦茶を押し通せる人間なんて居ないと先生は思っていた、今まではな」

教室の誰もが納得したような空気を醸し出す。

優子も思わず頷いていた。

龍子だってこんな無茶苦茶は不可能だろう。

そう思う。

「しかもだ、その無茶苦茶を、あの理事長相手に押し通したつてのが信じられん。正直、相当な権力がバックボーンにあると思う。くれぐれも粗相の無いようにしてくれよ？いや、正直教師としてこういう事を言うのはなんだと思うんだが、見た目がいかにも虐められそうな容姿でな？いや、本当にこういう事を言っちゃだめだと思うんだが、先生も一応人間なんだ。あの理事長みたいな化物相手に強引に事を押し通した化物を敵に回したりしたら、本気でこの学校が潰されかねん。……先刻も言ったが、そんなドラマみたいな事は現実では無いと思っていた、だがそれが起きたんだ。みんな、くれぐれも注意してくれ」

担任教師のあまりにも必死で、今までに見た事の無い姿に啞然とする生徒達。

いや彼だけじゃない、この学校の教師は皆、どこか悠然と、常に泰然と構えていた。

あの龍子が、納得できず反抗した時とて、どちらも譲らずやり合い、結果として互いに譲歩して手打ちになった。

教師を相手にそれをした龍子も凄いが、あの龍子を相手に引かず

にみせた教師も凄いと生徒の誰もが思ったものだ。
それがこれほどまでに怯えている。

しかもそれこそドラマのような無茶苦茶を強引に通しているという。

そんな荒唐無稽な現実が目の前に起きているのだ。

そして優子は気付く。

あの理事長みたいな化物。

担任はそう言った。

私立白無高等学校という学校法人の理事長は、私立白無高等学校の設立者その人だ。

いや正確には学校法人が設置者という事になるのだが。

私立白無高等学校の全ての始まりは今の理事長なのだ。

いや今でも理事長と言うべきか。

までも気付く。

そもそもこの学校は何時設立されたのだったか？

分からない。

思い出せない。

そもそも創立何周年記念、などといった学校特有の祝日があった記憶が無い。

駄目だ、この学校の理事長のおかしさに気付いたその時から、ほとんどおかしな事が思い浮かんでくる。

間違い無い。

自分だけだ。

他の誰もがこれから来る転校生のおかしさにしか考えが至っていない。

いやそもそもこの学校のおかしさなど、世間の誰も思い至っていない。

以前色々調べるといった龍子に見せて貰ったオカルト雑誌ですら、ふざけ半分で書いてるだけで、本気でないのが見て取れた。

なのに自分だけは今になって次々とおかしな事に気付き、疑問が

湧きあがってくる。

いったい自分は どうしてしまったというのか。
混乱して、思考がぐるぐると回る。

そんな中、教師は生徒達を何とか纏め上げ、自分も落ち着いた体勢を取ると、教室の外に向かって声を掛けた。

「それでは、久遠君、入ってくれ」

「はい」

美声であつた。

まるで天上の最も威厳ある神が、全てを威圧するかのような、そんな良く通り、誰しもに従う事を甘美と感じさせるような美声。

その声に、生徒達は教師の言つた事を忘れ、思わず入って来る生徒に対し過剰な期待を抱く。

そしてその期待は裏切られた。

しかも期待の真逆と言つてもいい、そんな落差だ。

その転校生のあまりの風貌に生徒達は啞然とする。

身長は190センチメートル程だろうか。

高校1年としてはあまりにも長身に過ぎる。

腰の位置も高く脚も非常に長いと思われる。

実にスマートな体型で、肉体については非常に恵まれた物を持つていると言えた。

だがそれが長所とはなっていない。

まず見てギョツとさせられるのがその髪だ。

手入れの全くされていないボサボサ髪。

それがその長身の足下に届くまでに伸びている。

前髪も顎にまで届く程だ。

だが、ふつ、と優子は気が付く。

その髪が、全く手入れされてない為、全体的には色褪せているとはいえ、ほんの僅か、所々に、ぬばたまの様に黒く艶やかな部分が覗いている。

これは手入れすれば相当に綺麗な艶やかで滑らかなサラサラとし

た漆黒の髪になるんじゃないかと思う。

次に驚かされるのが、前髪の間から僅かにギョロリと覗く瞳。

なまじ、その輝きが強いだけに、誰もが恐怖さえ感じさせられる。だが、とまた優子は思った。

一瞬僅かに除いた目の形。

丸く大きく、それでいて切れ長で、そしてその瞳の色はひどく澄んでいた。

僅かに覗いた鼻もスラリと鼻梁が通り、細く高く。

なんとなれば、龍子が自分に良く言っていたように、素材は極上という奴なのではないかと思う。

ふと、優子は周囲がこんなにも驚いている中で、何故自分はこんなにも冷静に転校生を観察してられるのか、とまた不思議に思う。

突然、視線を感じる。

優子が思わず転校生に目を向けると、一瞬、視線が合った気がした。

ゾツとする。

今の一瞬、まるで、転校生の瞳が、様々な色を混ぜて濁りながら、それでいてなお強く輝く、深淵の如き黄金の輝きを宿しているように見えたのだ。

当然、一瞬の話だ。

次の瞬間にはごく普通の黒い瞳に戻っている。

いや、戻るも何も錯覚だったのだろう。

人間の瞳は、決して光ったり、しかもあんな底知れない色に光ったりなどしない。

恐怖を忘れ、気を紛らわす為にも優子は観察を続ける事にする。

次に驚かされるのは、あの肌の色合いとかさつきだろう。

だが明らかにあれはただの手入れ不足だ。

現に、手入れなど必要のない部分の肌の色としとやかさは、まるで赤ちゃんの肌のように……。

思わず優子はムツとした。

なんだこいつは。

女以上に綺麗な肌を持ちながら、それを敢えて汚く放置してるのかと、苛立ちを覚える。

そのままに次に他の生徒達が恐怖さえ感じてるだろう部分を見る唇だ。

あまりにかさかさで、紫がかってさえいる唇。

だがこれも単に手入れ不足。

しかも相当放置していると来たものだ。

ふざけるな、と思う。

なにせ、ほんの僅か端だが、唇の地の色合いと見える場所は、これまた赤ちゃんのように艶やかな、綺麗な色合いの唇が覗いているのだ。

これは、あれか？

私達女子に喧嘩を売っているのか？

わざと容姿を汚くしているようにしか見えない。

思わずギリツと歯軋りする。

優子とて目立たないようにはしている。

だから龍子に色々と言われた。

だが優子の場合はいくまで目立たないようにといいただけだ。

お洒落などはない。

だが、きちんと必要最低限の手入れぐらいしている。

あれはそれ以前だ。

問題外だ。

その証拠が最後の問題点。

制服。

どう考えても転校してきたばかりで、汚しようなない制服。

それがぐしゃぐしゃに、汚く、汚れていた。

ああ、ああ、分かった。

もうあれはわざとだ。

それ以外ありえない。

何がしたいか知らないが、わざとそんな真似をして喧嘩を売っているんだな。

先ほど、一瞬感じた恐怖など忘れて優子は憤る。

そもそも、優子ほど観察した者でなければ、喧嘩を売られたなどと感じることもないのだが。

現に、優子以外の誰も、転校生のそんな、恐らくは素の姿には気付いていない。

ふと優子はまたも気付いてしまう。

転校生は嗤っていた。

明らかに嘲るような唇の形。

どこまでも見下すような目。

そう、転校生は自分以外の全てを下らないとばかりに、見下し嘲っていた。

当然気付いているのは優子だけ。

だが優子は自分の中に何かプツンという音を聞いた。
なんだろう。

どうしてだろう。

初対面の相手だ。

しかも関わりもない相手だ。

ただの転校生だ。

そいつが何を考えていようと関係無い筈だ。

だが決定的に気に触る。

全てが鼻に付く。

大人しい優子としては珍しい感情だ。

どれほどの状況にあってもこれほど激昂した事はない。

ただ……悲しいかな。

それほどに激昂しても、決して行動に出れないのも、優子という少女であるのだが。

今回もまた、結局は何も言えず、行動できず、そのままに座って

いるだけ。

それだけしかできない優子。

ふと、やはり自分は情けないな、と俯いてしまう。

だから気付かなかった。

転校生が、自分を見て、見下しも嘲りも消し、ただ失望の視線を向けた事を。

顔を上げた時には、既に転校生は、先ほどまでと同じ状態に戻っていた。

なのでやはり優子は気付かない。

「それでは久遠君、自己紹介をしてもらえだろうか」

「ええ」

相変わらずの美声で、実に素っ気無く。

そう担任に対してさえ、どうでも良さそうに、傲岸なまでの態度で、ズカズカと歩み寄る転校生。

あまりの態度に引き攣りつつも、その長身から来る圧迫感、それに先ほど自らが告げた得体の知れないバックボーンを畏れてか、何も言えない担任。

そのまま転校生は、担任を無視、素通りし、そのまま黒板に向き直ると、チョークを取る。

またもあまりの態度に憤りを覚えつつも、何も言えずにいる担任。そんな担任の姿に失望の溜息を漏らす数名の生徒。

これでもこの学園の教師は皆、生徒からそれなりに尊敬されているのだ。

誰かが特別という訳ではないが、誰もがそれなりに。

そう、皆が皆、かなり優秀だから。

だが、流石にこのような姿を見せられては幻滅せざるを得ない。いくら相手が得体が知れないとしてもだ。

いや、むしろだからこそ、しっかりとした姿を見せて欲しかった。そのような生徒達の視線が担任に突き刺さる。

担任もまた、自らの今の姿の情けなさには気付いているのだろう。

生徒達の視線から目を逸らすしか無い。

またも失望が深まる生徒達。

悪循環だ。

またも優子は気付いてしまう。

チョークを持ってから転校生が動かないでいると思ったら、彼は今まで以上におかしそうに嗤っていた。

自らが生み出した担任と生徒の軋轢、その悪循環を楽しむようにやはりプチンと切れる優子。

それでも動けない、何も言えない。

あまりの情けなさに泣きそうになる。

ここに龍子がいてくれたら、などと他力本願な事を考える。

転校生はふと、教室中を見回し、ふう、などと何かに失望したような溜息を吐くと、おもむろに、黒板に再び向き直り、チョークを持った手を振り上げた。

ガガガガッ。

あまりの強く激しい音に、担任も生徒達も、勿論優子もビクツと肩を震わせる。

そんな姿など気にもせずに、黒板に字を書き終えた転校生はやつと、始めて、まともに生徒達に向き直った。

隠れて殆ど見えない筈の目。

だがその目に睨まれてる事が容易く理解できるように、生徒達はいや担任すらも、背筋を伸ばし、ただ慄き言葉を待つ。

黒板に書かれた字は実に流麗で達筆であつた。

どこか風格さえ感じさせる。

そこに書かれた字は……。

「俺の名は久遠くおん憾怒かんど、変な名前だが気にするな、まあ適当に呼べ。よろしくなくていいし短い間の付き合いだ、まあ適当に頼む」

美声でもって浴びせられたあまりにも馬鹿にした物言いに、誰もが絶句する。

そして理解すると同時、皆が皆、その憤りに身を震わせるも何も

言えない。

その様子に、憾怒はどこか面白げにさえ嗤い告げる。

「ああ、その様子だと俺の後ろに付いてるのがどうか、俺の生まれがどうか、相当脅されたみたいだな。まあ、そこら辺は気にする必要はないぞ？その男……」

と担任に視線をやり、肩を竦めると続ける。

「まあ、アレにどんな風に言われたか知らんが、俺をここに無理に入れてくれた所と俺との付き合いは、まあ所謂ギブアンドテイクって奴でな。少なくとも学生同士の下らんいざこざなんぞに関係してくる事はないだろうさ。つーわけで、この生意気な転校生に焼きを入れるなり、集団で虐めるなり、煮るなり焼くなり好きにしてくれ。そっちの方が面白いし、なにより……」

ふと、そこで言葉を止め、やはり憾怒はただただ全てを馬鹿にするように肩を竦めてみせる。

見ると、クラスでも素行不良のグループの者達の一部は、何やら携帯でメールを打っていた。

恐らくは、他のクラスや学年の付き合いのある素行不良のグループの者達に連絡を取っているのだろう。

望み通りに憾怒に対して色々と仕掛ける為に。

他の生徒達はまだ憾怒に対して怯えた様子を見せている。

当然だ。

本当に後ろにそういう力がある存在が付いている事を宣言してのけたのだ。

単純に言葉通りに受け取り、気にしなくても大丈夫なんて思うのは馬鹿な連中だけだろう。

現に、素行不良のグループの者達でも、頭の働く者達は、ただ観察に徹している。

だが優子は、最後に、憾怒が小さく呟いた声が聞こえ、その内容が気になってならなかった。

『その方が俺の糧になるからな』とはいったいどういう意味なの

か？

どうやら他の者には聞こえていないようだ。

もしあんな不穏な言葉が聞こえていれば、もっと騒ぎになっているだろう。

先ほどから、何故自分はこんなにも、この相手に対し反応しているのか。

いや、反応できているのか。

いつもの自分なら、そもそもまともに見る事も出来ずに、ただ俯いている筈だ。

そのくらい、不気味な雰囲気を持つ相手である。

だが今回は必要以上に反応し、激昂し、自分でも意味が分からない。

ただ一つだけ分かった事があった。

こいつは普通じゃない。

龍子とは別の意味で。

このような状況を自ら作り出し、これほどに堂々と、これほどに泰然自若としている少年……そう自分達と同じ15か16歳の少年がどこに居るだろうか？

やはり特別なのだ。

良い意味か悪い意味かは別にしても。

僅かばかり羨ましくなる。

自分はまだにも平凡に過ぎるから、目立たな過ぎるから。

どうしてあれほどに目立って平然としているのだろう。

どうしてあれほどに敵意を向けられ堂々と楽しそうにしているのだろう。

どうしてこんな状況を自分から作り出すような事を嗤いながら出来るのだろう。

本当に不思議だった。

不思議でならなかった。

まるで別の生物のようにさえ思える。

というか、何かとんでもない事に気付いてしまった気がして、優子は慌てて視線を逸らした。

でも気になってまた見てしまう。

気の所為では無かった。

憾怒という少年、心無しか髪の色が良くなっている気がする。

いやそれだけじゃない、肌も唇もだ。

流石に制服までは変わらないが……。

いや、むしろそっちの方がおかしいだろう？

気の所為だと思いたい。

思いたいがかなり顕著な反応なのだ。

じっくり観察した自分だから気付いたのだろうとは思うが。

この状況でこの反応。

まるでなにか？

人の悪意を受けて、それを己が糧としているようにさえ見える。

まさか、そんな。

あまりに馬鹿げた考えに、だが突然先ほどの眩きが脳裏に蘇る。

『その方が俺の糧になるからな』。

馬鹿な。

ありえない。

優子は必死に否定する。

だってそれはあまりに異常に過ぎるだろう。

まるで人間じゃないみたいだ。

人間じゃなかったらなんだというのだ？

化物？

怪物？

幽霊？

ふざけるな！！

そんなものはありえない。

そう自分は否定した。

否定したのだ！！

あの龍子が行方不明になった時だつて否定したのに、今更、こんなふざけた転校生相手にそんな疑念を再発させるなどありえない！！

龍子に対して失礼だ！！

そう、オカルトもへつたくれもあるか。

龍子は帰ってくる。

必ず帰ってくるのだ。

優子が必死に自分に言い聞かせている中、担任は何とか奮闘していたらしい。

何時の間にか、教室の騒ぎはまた収まっていた。

そんな中悠々と、小憎らしくも、楽しそうに周囲を睥睨する憾怒。その姿がまた優子には気に障る。

そして、担任が信じられない事を告げた。

「それじゃあ久遠にはとりあえず、稲森の隣……と言っても分からんか。えー、廊下側から2列目の前から四番目の……」

「あー、とりあえずつまり、一つだけポツンと空いてるあの席って事ですよね？分かりますよふつーに。で、とりあえずってのは？」

「それはだな、その、つまり。非常に説明し難いんだが……」

「あ、じゃあいいです。俺も興味無いんです」

ギシリつと担任が齒軋りする音が聞こえた。

だったら聞くなと言いたいのだろう。

その気持ちは分かる。

ひっじょーに分かる。

今の優子には。

だがそれよりも、今の優子には重要な事があった。

「先生っ！！その席は龍子のっ！！」

思わず立ち上がり怒鳴り声を上げる。

教室の誰もが啞然とし、優子を凝視していた。

当然だろう。

優子自身でさえ信じられないくらいだ。

まさか自分がこのような行動に出るとは。

だが、これだけは譲れなかった。

優子の隣は今言ったように、現在行方不明の龍子の席なのだ。その席を他人に使わせる。

それだけでも耐え難いのに、その相手がこの妙にム力つくこの男。思わずキツと担任を睨み付ける。

「あー、だがな稲森。現実は今空いている席はそしき無い訳で」
流石の担任も戸惑いを隠せないでいる。

普段の優子を思えば当然だろう。

だが優子は引かない。

「そんなのっ！！新しい席を用意すれば良いじゃないですかっ！！」

「それこそ時間の無駄だろ？そこが誰の席か知らんが、今使えない事情があるなら俺が使ってもなんの問題もなかるうに」

ふっと、本気で何の感慨も無い声がすぐ近くで聞こえた。

思わずビクリと跳ね上がる。

声の聞こえた方向に視線を向けると、何時の間にか……そう本当に何時の間にか龍子の、そして今は仮に憾怒の物となった席のすぐ傍、つまりは優子のすぐ傍に憾怒が立っている。

周囲の者も啞然としているところを見ると、優子だけでなく、他の者達も憾怒の移動に気付かなかったのだろう。

本当に得体が知れない。

「ふざけた事を言わないで！！この席の本当の主はね、貴方なんかとじゃ……っ！？」

「へえ、綺麗な髪じゃないか」
いきなり。

そう本当にいきなり不躰に髪に触られ、そんな事を言われ、本来なら優子はただ嫌悪を感じる筈だった。

だが不意に、その言葉に思い出してしまう。

『やっぱり綺麗な髪をしてるのね、手入れとかすればいいのに』
と、そう言った龍子の台詞を。

だが憾怒はあっさりと髪から手を放すと、鬱陶しげに自分の前髪

をかき上げる。

そんなに邪魔なら切ればいいのに、と思いつつ優子は思わず見惚れてしまっていた。

他にも男も女も関係無く教室中の人間が見惚れる。

顔色の悪さ、肌のかさつき、唇の血色の悪さなどは隠す事はできずとも、優子が思った通り、そこには確かに、男女関係無く息を呑むような絶世の美貌があった。

ニヤリと嗤いその口が開かれる。

そして紡がれた言葉は。

「でもドブス」

ばしいーーーーんっ!!!!!!

思わず優子は、思いつきり平手で憾怒の頬を張っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3163ba/>

霊喰らい（たまぐらい）

2012年1月15日08時00分発行